

The 12th IAGG Master Class on Ageing in Asia に参加して

坂井 智達

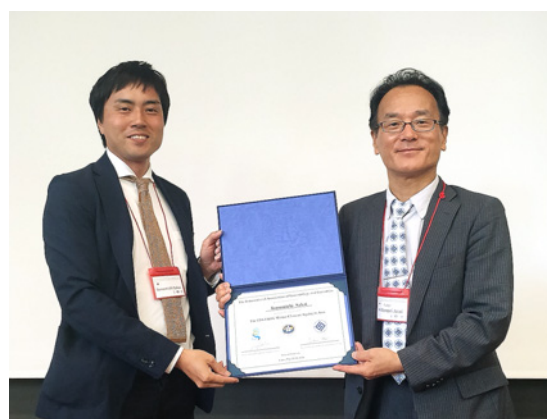
(日老医誌 2024 ; 61 : 500-501)

本会は2024年5月に東京にて開催され、3日間に渡って、アジア各国の若手の老年科医（50人程度）が集まり、昼間は全体講義とグループセッション（研究発表とケースディスカッション）、夜は懇親会が行われました。

まず、全体講義では、アジアを代表する先生方による、各老年症候群に関する診療の基本から最新のガイドラインの紹介や、現在進行中の研究トピックまで網羅された、盛りだくさんの内容でした。会場からもたくさんの質問が飛び交い、他のアジア諸国での診療実態を知ることができました。私自身大学の老年内科で診療している中でも、どのような診療がスタンダードなのかが、見えづらく感じていたので、それと大きくずれていないことを認識できたという意味でもいい機会になりました。

グループセッションの研究発表では、少人数の班（参加者とチューターの先生）に分かれ、参加者が自身の研究内容を発表しました。各々研究者としてのステージも違うため、初期段階の研究から、既に論文化された研究まで内容は様々でした。それぞれの発表の後にはディスカッションの時間があり、私のグループでは、チューターに学術誌のエディターを務める先生がいたこともあり、研究初心者としてどうあるべきかや、良い論文を書くための心得まで、現実的な指導が飛んでいました。グループでのケースディスカッションでは、提示された症例に対してアセスメントと介入をメンバーで議論しました。特に介入の議論では、国による医療資源、介護資源の違いから、様々な意見が出ていたのが印象的でした。別に、グループ代表者による、全体での研究発表や、ケースの発表の時間もありました。

初日夜に、全体での懇親会、翌日夜にグループ毎の懇親会がありました。高齢者を取り巻く、社会通念、医療介護の社会インフラは国や地域毎に異なりますが、より



良い高齢者診療を目指す心意気は皆に共通していることを実感できました。

全体を通して、西欧中心のエビデンスをそのままアジアに適用していいのかという意味では、近い部分が多いアジアという括りで、エビデンスを創出することも大切だと思ったのと同時に、アジア各国の違いを強く感じました。せめても社会制度が同じ、国単位でのエビデン

スの重要性を再認識し、自身の臨床、研究へのモチベーションとなりました。

このような機会を設けて下さった IAGG・日本老年医学会の運営の皆様、とても有意義な時間を作ってくれた

参加者、チューターの皆様、快く参加を許してくれた名古屋大学老年内科の皆様と家族にこの場を借りて感謝の意を評したいと思います。